

金沢大学工学部 正 松浦義満

1. まえがき. 都市計画に携わる技術者あるいは研究者が、計画案作成作業を進めるに当たって、最初に直面する問題は都市を成長あるいは衰退させる要因は何か、またそれらの要因が如何様に関わり合っているかということである。この問題はルイス・マンホード、アーサー・コーン等、多くの都市研究者によって取り組まれ、顕著な成果が発表されている。筆者は金沢の都市形成の歴史を調べ、都市は如何にして成長するか、また都市文化は如何なる状態において向上するか、等について考察したので、それについて報告する。

2. 城下町金沢の成立と地位の変化. 金沢の発祥は内乱の続発する中世末期にある。この時期、北陸加賀ではすまじい勢いでエー揆が起り、ついには室町幕府の支配権を拒否して加賀を「土民が政務をとる国」とし、一つの共和国を樹立させた。しかし、共和国とはいふものの初期の支配は本願寺系列の寺院群の集団指導体制の下におかれており、享祿の錯乱(1531)を経て本願寺が指導権を奪い、加賀を法主の領国として直接支配するようになった。本願寺は加賀支配の足場として、後に金沢城が築かれた位置に天文15年(1546)、大寺院御山御坊を建立し、本願寺派遣の官僚を駐在させた。この御坊をめぐって町立が行われ、寺内町が形成された。この町は四方を防禦のため、厳重に土居をめぐらせており、いわば寺院城砦都市とでも呼ぶべきものであった。この御山御坊寺内町の形成が金沢の発祥である。その後、織豊時代、徳川時代を通じて金沢は加賀、越中、能登の3州を支配する100万石大名の城下町として領国の富を一臽に集めて発展していった。明治の前半、金沢は幕藩体制の崩壊と共に衰退したけれども、明治後半、才9師団が設置されたことにより、軍都として生き返った。現在は県庁および中央出先機関の所在する地方中心都市として存続している。

ここで全国の諸都市に対する金沢の相対的地位の変化について述べておく。都市の地位を人口の規模でみることは必ずしも正しくないが、経済力があり、文化の栄える都市には人が集まるという前提に立てば人口規模で都市の地位をみることは許されるであろう。金沢の人口は元禄期(1700年前後)には12万人にも達しておりその人口規模は江戸、大阪、京都に次いで四番目の都市であったといわれている。その地位は幕末まで保持されていた。しかし、版籍奉還、廃藩置県の実行に伴い、人口が4割も減少したため、明治23年には名古屋、神戸、横浜に追い越されて7位に落ち、明治31年には広島、長崎に追い越されて9位に下った。才1回の国勢調査が行われた大正9年には函館に追い越されて10位となっている。当時人口10万人以上の都市は16ある。それより10年後の昭和5年には16位となり、その後も地位の低下は続き、昭和50年には人口39万5千人となったけれども、大阪近郊の豊中市と28位を競うに至った。

3. 金沢の都市形成要因. (1) 都市繁栄の基礎は富の獲得能力にある。都市が富を獲得する力および手段は時代により、また地域により異なっている。収奪、課税、交易により領国、池地域、外国から集められた富の量に比例して、多くの都市は成長、停滞、衰退を繰り返して来たといえる。この事象は金沢の都市発展過程にもみられる。前田氏の領国は天正11年(1582)には能登に加賀2郡を含めた範囲であったけれども、18年後の慶長5年(1600)には関ヶ原合戦の功績等により、一挙に倍增し、加賀、越中、能登の3州(現在の石川県と富山県)に拡張し、前田氏は120万石の領主となった。同時に藩体制の強化が進められ、家臣の数も急激に増加し、寛永初年(1623)には1100人強となっており、陪臣および家族を含めると金沢の武家人

口は6万人を超えていたといわれている。更に武士達の生活必需品を供給するため商人、職人が諸国から呼び集められているから、この時期の金沢の総人口は10万人を超えていたと推測される。当時は5公5民といわれ米の生産高の半分のおよそ60万石が貢租米および年貢として強制的に金沢に集められた。しかし、そのうちおよそ60%は江戸で費やされている。従って、都市金沢は25万石の富の上に築かれたと考えられる。以後、幕末まで大きな変動はない。藩制末期の金沢にはおよそ12万人の武士と町人が住んでいた。この人々の生活をささえていた唯一の財源は藩財政と藩士の俸禄であった。先に述べた如く、その経済基盤が廃藩置県以降、士族の凋落とともに急激に崩れ、明治29年には4割に近い人口減少をきたしていた。この人口減少を増加に転じさせた主な要因は才9師団の設置、才四高等学校の設立等により中央から富が流れこんできたところにあると判断される。

(2) 都市の成長が旺盛なとき文化活動は積極的になり、都市活動が停滞しているとき、文化活動は受動的になる。加賀藩の初代藩主前田利家は戦国武将であったけれども考吉の影響を受け雅やかな王朝文化に憧れ、近づいていった。藩主の身についた飛山風王朝文化や趣味は次第に家臣および町人に伝わり、金沢文化の基調となった。2代利長、3代利常の時代になると文化施策に重宝をおくようになり、藩予算の6割近くを文化行政に投入し、明園儒者王伯子を招聘するなどして漢学、文学、芸術等を盛んにしていった。4代藩主綱紀は徳川光圀の助言を受け、おおいに文化の興隆をはかった。綱紀は強力な経済力を背景に多くの学者、文化人を招き、禄をよえらるとともに、古今内外の膨大な図書を収集した。綱紀はこのようにして加賀藩に学問の芽を植えつけ、おおいに文運を興隆させたが、大半は江戸で行なわれたと考えられる。綱紀の時代(1645~1723)が政治においても文化においても加賀藩の絶頂期であった。それ以後は封建体制が徹底したことにより、社会は固定化し、諸々の活動は停滞してきた。こうした事実から、文化を興隆させるには潤沢な資金と旺盛な好奇心が必要であるといえる。また経済活動、市民の身分等が固定化した都市社会は創造力および活動意欲を摘み取ってしまうといえる。

(3) 権力あるいは権威のない都市には秀れた文化人は集まり難い。加賀藩は儒者の不下順庵、空鳩巢、本草学(薬学)の稻生若水の如き著名な学者あるいは文化人を多く招き、禄を与えている。不下順庵は加賀藩の禄をしながら京都に住んでおり、空鳩巢は江戸と金沢を、稻生若水は京都と金沢を往来し、金沢に住みついていた。その他、加賀藩とかわりをもった多くの文化人は江戸本郷の加賀屋敷に出入りしたものであろう。「加賀は天下の書府なり」と新井白石が感嘆したという。しかし白石が見た図書は江戸の加賀屋敷にあったものであろう。従って加賀藩の文化活動を直ちに金沢の文化活動とすることはできない。

(4) 長い間に培われてきた伝統的気風は改め難く、また向上意欲のない都市には新しい産業は根づかない。明治の前期、金沢の人口が4割も減少したことは前述した。金沢の経済が非常に時に直面しているにもかかわらず、260年という長い藩政期のぬるま湯の中に育った「爪をかくして身を陰にもつ」、「風俗おとなしやかにして尖る気なし」と評価される気風が依然として残っており、この気風が金沢の復興を著しく妨げた。

(5) たとえ伝統産業であっても時代を先取した製品、作品を作製しなければ販路は閉される。明治に入って、金沢の伝統工芸は展覧会を開催するなどして販路を求めたけれども、藩政期の陳腐な意匠を守り続けたため、衰微の一途をたどった。これが再興されたのは東京美術学校教授島田佳実(四楽亭)の指導を受け、新たなデザインを導入をはかってからである。

4. むすび 金沢は広大な領国をもつ封建大名の城下町として成立し、近代に入り地方中心都市として存続してきた。しかし、わが国の人口の8割以上が才2次、才3次産業に属し、都市に住むようになった現在では、国家自体が1つの都市群となり、従来の都市対農村の関係は都市対都市の関係に変ってきている。このように社会が変化してきたとき、発展する都市とは多くの秀れた人間が移り住むことを望む都市ではなからうか。